

誰もが主人公になれる

「未来」に夢を託す活動もさまざまですが、中でも、「かけがえのない地球を守る」自然保護や環境問題をテーマとする活動は数多く行われています。

例えば、チエルノブイリの事故をきっかけに、放射能汚染問題に取り組み活動に参加する主婦が増えているそうです。

「未来の地球の姿を想像しながら、子どもたち豊かな地球を残す

「物語」を描き、自分がその主人公となる。地球規模の空間的な広がり、遠い未来という時間的な広がりを感じながら、彼女たちは自分の世界が広がる楽しさを実感しているはずだ(早瀬さん)。

未来を見据えた社会貢献活動には、自分の「夢」や「願い」を「物語」に描き、その主人公として行動する楽しさがあるようです。

環境保護の他にも、文化財の保護、データベースづくり、あるいは、想像力を働かせる典型的な

と

を

本古、人々は

ました。人間が

歌活動の源に

さん(日本オ

クイア活動の現

員歌活動の醒

また、その死後

政治の生き方

を

は

は

は

は

は

は

は



活動例として、既に亡くなった人の記録をつくることなどもあります。「こうした活動に携わっている人たちは、仏像や絵画、資料などに心の中で語りかけ、想像力を働かせて『声なき声』を聞いているのです」(早瀬さん)。

正しさよりも 楽しさを大切に

対人活動の魅力が共感ならば、『物語を描く』社会貢献活動の魅力は、自分の発想で自由に『物語』をつくれるところにあると言えるでしょう。しかしその反面、活動が独善的になりやすいという落とし穴もあるので、注意が必要です。

とはいえ、『面白い活動、伸びる活動には、必ず思いこみや思い上がりがある』(早瀬さん)といえます。「私がやらなければ」「私だからできる」といったある程度の自負は、活動の活性化に役立つというわけです。要は、独善と自負の境界をいかに自分で見極められるか、です。

また、こうした活動の場合、その根拠に社会正義や理想を掲げがちですが、正しさばかりを追求すると、活動は独善に止まらず自閉的になる恐れすらあります。あくまでも活動の動機は「好きだから」「興味があるから」という具合に「自分」を主体にすることが望まれます。

シニアの場合、「日本をこんな社会にしてみました」「戦友に申し訳ない」など、罪滅ぼしの気持ちから活動を始めるケースも少なくないようですが、その気持ちをひきずったままでは、活動は

長続きしません。数多くの挫折した例を知る早瀬さんや横さんは「自分」を失った活動は決して成功しないことを力説しています。

一人の物語から みんなの物語へ

そもそも、「どんなボランティア活動をするにしても、最も大切なことは、問題に気付いた人が、その解決策をみんなまで考えられるよう、問題の存在を世の中に広く伝えることです。特に、自然保護や環境問題などの大きなテーマの場合は、個人の力だけでは如何ともしがたいため、できるだけ広く問題を伝え、仲間を一人でも多く増やし、地域や社会全体の問題として取り組む努力が必要不可欠になります」(横さん)。

問題を社会全体で共有すること、それはつまり誰かの『物語』をできるだけ多くの人が共有すること、と言いかえられるのではないのでしょうか。物語の主人公が増えれば、その物語にはさまざまな見方、展開の仕方が生まれてきます。となれば、『ひとりよがりの活動』に陥る危険性もかなり低くなるのではないのでしょうか。

また、仲間と互いに『物語』について語り合いつつながら活動を続けることで、問題点がより明確になったり、活動の方向性はつきりと見えてくることも珍しくないようです。そのような新たな発見の瞬間に遭遇することも、物語を描いて社会貢献活動をする楽しさのひとつと言えるでしょう。

宮沢賢治の「物語」

昨年、生誕百年を迎え、改めて各方面からスポットライトを浴びた宮沢賢治。彼の作品はもちろん、その生涯に共感を覚える現代人は少なくありません。人々は賢治の生き方のどんなところに感銘しているのでしょうか。

一九二六年、賢治は岩手県立花巻農業高校を退職し、農村に入って開墾・自活を始めます。「世界ぜんたいが幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」(自著『農民芸術概論綱要』より)という願いを実現させるべく、羅須地人協会を設立。花巻農業高校の教え子らとともに、土壌学・植物学・鉱物学・芸術関係の講義や集會、レコードコンサートなどの他、無料で肥料設計や稲作相談に応じ、貧困に苦しむ農村の向上を目指しました。

賢治は「自分が語るばかりでなく、農民の経験にも静かに耳を傾け」、農民と相互に学びながら、「ひとりの農民として他の農民と肩を並べる関係に入ろうとした」(栗原彰著『へやさしさ』の副題「新曜社刊より」)といえます。

「すべてのいきものほんたうの幸福」を求めた賢治の理想郷の夢は実現しないまま、一九三三年九月二十一日、三十七歳の生涯は閉じられました。けれども、死後六十年以上を経た現在も、多くの人々が彼の作品に感動し、その生き方を熱烈に支持しています。それはきつと「賢治の描いた『物語』には、常人には及ばない深さと大きさがあつたからではないか」と早瀬昇さんは分析します。

シニアの皆さんの場合も、自分の『物語』の結末を見ることはできないかもしれません。しかし、賢治が私たちに影響を与えているように、今踏み出した一歩が、いつかどこかで誰かの役に立つ可能性も大きいのです。